

2019(令和元)年度

アカデミア賞

受賞者業績概要

【式典】

日時： 令和2年2月7日(金) 10:00~15:00
(受付 9時30分~)

場所： 都ホテル 京都八条 陽明殿(京都駅八条口)

アカデミア賞は、我が国及び世界の文化、社会、国際交流のそれぞれの分野に著しく貢献された方に授与されます。

本会は、受賞者の方がアカデミアの精神を体し、その専門とする分野において一層の研鑽と精進を積み、国家及び世界繁栄の支柱となられんことを願い、ここに受賞者の業績を披露し、ご出席の皆様とともにその功績を称え、永く後世に名をとどめんとするものであります。

一般社団法人 全国日本学士会

アカデミアの由来

アカデミアの由来を、今こそ心に留めおこう。時代の状況も、それを求めている。

古代ギリシアの都市国家アテナイ（アテネ）。町を囲む城壁の外、北西の郊外に、アカデモスという名の英雄神（英霊）を祀る土地があつて、英霊の名にちなんで「アカデメシア」または「アカデミア」と呼ばれ、プラタナスが美しく繁る公園として、古くから人びとに親しまれていた。紀元前 387 年ころ、哲学者プラトンがこの地に学園を創設し、それ以来「アカデミア」（アカデメシア）は、このプラトンの学園の名前となった。

プラトンはどのような経緯で、この学園アカデミアを創設したのであろうか。アカデミアの精神とは、何であつたか。

紀元前 399 年、プラトンの敬愛してやまなかつたソクラテスが、ギリシアの世界大戦であつたペロポネソス戦争終結後の政治的混乱のあおりを受けて、国の法廷に告発され、死刑に処せられた。この出来事は、それまで政治の実践を志していた当時 28 歳のプラトンに、大きな衝撃を与えた。同時代の誰よりも正義の人であつたソクラテスが、国法の名のもとに処刑されたことへの憤り。このような不条理を根絶するためには、政治的党派の間の争いといった次元を突き抜けた、抜本的な国家社会の変革しか道はないと、プラトンは考えるようになる。

だが、その抜本的な変革とは、どのようなものであるべきか。プラトンはその方途をまさぐり求めて、あらためて亡きソクラテスの哲学の教えを省みて噛みしめながら、12 年間にわたる思索と旅の遍歴時代を過ごす。考察のすえ、根本的にはこれしか道はありえないと思ひ定めた原則は、政治的権力と哲学的（学問的）精神との一体化、すなわち、国の統治に当る者は、知を希求してやまない哲人（philosophos）であるべきだという、のちに主著『国家』で表明された哲人政治の思想であつた。

この理想の完全な実現は——特に、「哲学」がまだ一人前の仕事と認められていなかった当時のアテナイでは——不可能かもしれない。しかし少しでもこの理想に近づく努力を続けたいかぎり、人類は永久に禍いと不幸から救われないだろう。そう心に決めたプラトンは、遍歴時代最後のシケリア（シチリア）への旅からアテナイに帰ると、自分の理想と目的にかなつた教育を行なつて有為の人材を育成するために、上述のように、学園アカデミアを創設したのである。時にプラトンは 40 歳。

アカデミアは何人も政治家や立法家を世に出したが、その教育方法は、哲学的精神にもとづいて真理そのものへと「魂の目を向けかえること」を目ざす。純理想的な学問——数学・天文学・音階理論・哲学的問答法など——の学習と研究であつた。こうしてプラトンの学園は、ギリシアにおける学問研究の一大センターとなる。エウクレイデス（ユークリッド）の幾何学も、その基礎はアカデミアにおいて形づくられた。

紀元前 4 世紀前半の時点に創立されたアカデミアは、プラトン亡きのちも代々の学頭に継承されて、紀元後の 529 年に東ローマ皇帝ユスティニアヌスの勅令によって閉鎖されるまで、約 900 年間存続した。そして学園は閉鎖されても、「アカデミア」（アカデミー）の名は今日まで、大学などの教育研究機関や、学問上の組織体を表わす普通名詞として、生き続けている。

名前だけでなく、大本にあつた精神も、時代を超えて不朽である。政治家は、真の意味でのすぐれた知性をもたなければならないこと、教育とは、魂の目を向けかえること仕事であること。そのことによつてのみ人間は、確かな幸福に与かりうる。——こうした理念は、今の世にこそ生かされなければならないだろう。

Contents

○2019（令和元）年度アカデミア賞授賞式 式典次第・・・ 1

○2019（令和元）年度アカデミア賞受賞者業績概要

「文化部門」

ふじのくに地球環境史ミュージアム館長

国際日本文化研究センター名誉教授

総合研究大学院大学名誉教授

安田喜憲氏・・・・・・ 3

「文化・社会部門」

広島大学名誉教授

NPO 法人 里海づくり研究会議 理事長

NPO 法人 瀬戸内海研究会議 顧問

松田治氏・・・・・・ 14

式典次第

10:00 ~ 11:00

受賞者入場着席

1. 開 式 の 辞
2. 全国日本学士会 会長挨拶
3. 業績発表と授与
4. 受賞者代表謝辞
5. 来賓祝辞
6. 閉 式 の 辞

受賞者記念講演 11:00~12:30

記念撮影 12:30~12:50

※記念撮影の間、祝賀懇親会の準備をいたしますので、
ロビーにてしばらくお待ち願います。

祝賀懇親会次第

— 新年互礼会 —

13 : 00 ~ 15 : 00

- 1 . 開 宴 の 辞
- 2 . 会 長 挨拶
- 3 . 祝 辞
- 4 . 乾 杯
- 5 . 閉 宴 の 辞

アカデミア賞（文化部門）

氏 名 : やす だ よし のり
安 田 喜 憲

生 年 月 日 : 1946（昭和 21）年 11 月 24 日生

出 身 地 : 三重県

学 歴 :

- 1970（昭和 45）年 3 月 立命館大学文学部地理学科卒業
- 1972（昭和 47）年 3 月 東北大学大学院理学研究科修士課程修了
- 1972（昭和 47）年 4 月 東北大学大学院理学研究科博士課程進学
- 1974（昭和 49）年 11 月 東北大学大学院理学研究科博士課程中途退学

学 位 ・ 称 号 : 東北大学理学博士（1978 年）

現在の主な職業 :

- ふじのくに地球環境史ミュージアム館長
- 国際日本文化研究センター名誉教授
- 総合研究大学院大学名誉教授

経 歴 :

- 1974（昭和 49）年 11 月 広島大学総合科学部教務員
- 1977（昭和 52）年 8 月 広島大学総合科学部助手
- 1988（昭和 63）年 4 月 国際日本文化研究センター助教授
- 1994（平成 6）年 4 月 国際日本文化研究センター教授
- 1995（平成 7）年 4 月 麗澤大学客員教授
- 1996（平成 8）年 9 月 ドイツ・フンボルト大学客員教授
- 1997（平成 9）年 4 月 京都大学大学院理学研究科教授（併任）（～1999 年 3 月）
- 2002（平成 14）年 9 月 ドイツ・フンボルト大学客員教授

- 2006 (平成 18) 年 4 月 スウェーデン王立科学アカデミー会員 (現在に至る)
- 2007 (平成 19) 年 4 月 東京財団主任研究員
- 2008 (平成 20) 年 4 月 稲盛財団環境文明倫理研究センター所長
- 2012 (平成 24) 年 4 月 東北大学大学院環境科学研究科教授
国際日本文化研究センター名誉教授
総合研究大学院大学名誉教授
静岡県富士山世界遺産課参与
- 2013 (平成 25) 年 4 月 立命館大学環太平洋文明研究センター所長 (~2019 年 3 月)
- 2015 (平成 27) 年 4 月 静岡県補佐官 (現在に至る)
静岡県ふじのくに地球環境史ミュージアム館長 (現在に至る)

【その他：プロジェクト研究代表者】

- 1991-1994 年度 文部科学省重点領域研究「文明と環境」計画
- 1997-2001 年度 文部科学省 COE 拠点形成プロジェクト「長江文明の探求」
- 2006-2010 年度 文部科学省科学研究費基盤 S「年縞による高精度の環境史復元と稲漁撈文明の興亡」

その他、経済産業省、環境省、日本経団連、東京財団などの委託研究事業の研究代表者及び多くのビッグプロジェクトリーダーを務める。

過去における表彰：

- 1996 (平成 8) 年 5 月 中日文化賞
- 2007 (平成 19) 年 11 月 紫綬褒章
- 2010 (平成 22) 年 9 月 中山賞大賞
- 2014 (平成 26) 年 11 月 東海テレビ文化賞

主要著書：

【英文著書】

- ①Yasuda, Y. and Hudson, M. J.(eds.): 『Multidisciplinary Studies of the Environment and Civilization』 Routledge, London and New York, 2017, 184pp._
- ②Yasuda, Y. (ed.): 『Water Civilization—From Yangtze to Khmer Civilizations—』 Springer, Heidelberg, New York, Tokyo, 2012, 470pp
- ③Fujiki, T., Zhou, Z. and Yasuda, Y.: 『The Pollen Flora of Yunnan, China.』 Lustre Press and

Roli Books, Delhi, 2005, 144pp.

- ④Yasuda, Y. (ed.): 『*Monsoon and Civilization*』 Lustre Press and Roli Books, Delhi, 2004, 400pp.
- ⑤Yasuda, Y. (ed.): 『*The Origins of Pottery and Agriculture*』 Lustre Press and Roli Books, Delhi, 2002, 400pp.
- ⑥Yasuda, Y. (ed.): 『*Forest and Civilisations*』 Lustre Press and Roli Books, Delhi, 2001, 200pp.

【2000年以降の主要英語論文】

- ①Kitagawa, H. & Fukuzawa, H., & Nakamura, T. & Okamura, M. & Takemura, A. & Hayashida, A. and Yasuda, Y.: 14C Dating of Varved Sediments from Lake Suigetsu, Central Japan and Atmospheric 14C Change During the Late Pleistocene. *Radiocarbon*, 37, 371-378, 2019.
- ②Kitagawa, J. & Kojima, H. & Yoshida, T. and Yasuda, Y.: Adaptations of the Early Jomon people in their settlement relocation to climatic change around Lake Mikata, Central Japan. *Journal of Archaeology*, DOI: 10.1016/03.002, 2018.
- ③Flower R.J. & Keatings, K. & Mohamed A. Hamdan and Yasuda, Y.: The structure and significance of early Holocene laminated lake sediments in the Faiyum Depression (Egypt) with special reference to diatoms. *Diatom Research*, 27(3), 1-14, DOI: 10.1080/0269249X.2012.703624, 2012.
- ④Nasu, H. & Hai-Bin Gu & Momohara, A. and Yasuda, Y.: Land-use change for rice and foxtail millet cultivation. *Archaeol. Anthropol. Sci.*, DOI 10.1007/s12520-011-0077-9, 2011.
- ⑤Okuno, M. & Torii, M. & Yamada, K. & Shinozuka, Y. & Danhara, T. & Gotanda, K. & Yonenobu, H. and Yasuda, Y.: Widespread tephras in sediments from lake Ichi-no-Megata in northern Japan: Their description, correlation and significance. *Quaternary International*, 246, 270-277, 2011.
- ⑥Yasuda, Y.: Climate change and the origin and development of rice cultivation in the Yangtze River basin, China. *AMBIO*, 14, 502-506, 2008.
- ⑦Flenley, J. and Yasuda, Y.: Environmental variability and human adaptation in the Pacific Rim and the Sustainability of the Islands. *Quaternary International*, 184, 1-3, 2008.
- ⑧Kitagawa, J. and Yasuda, Y.: Development and distribution of *Castanea* and *Aesculus* culture during the Jomon Period in Japan. *Quaternary International*, 184, 41-55, 2008.

- ⑨Gotanda, K. & Nakagawa, T. & Tarasov, P.E. and Yasuda, Y. :Disturbed vegetation reconstruction using the biomization method from Japanese pollen data: Modern and late Quaternary samples. *Quaternary International*, 184, 56-74, 2008.
- ⑩Gotanda, K. and Yasuda, Y.: Spatial biome changes in southwestern Japan since the Last Glacial Maximum. *Quaternary International*, 184, 84-93, 2008.
- ⑪Makohonienko,M. & Kitagawa, H. & Fujiki, T. & Xin L. & Yasuda, Y. and Huaining, Y. : Late Holocene vegetation changes and human impact in the Changbai Mountains area, Northeast China. *Quaternary International*, 184, 94-1-8, 2008.
- ⑫Flenley, J. and Yasuda, Y. (eds.): Environmental variability and human adaptation in the Pacific rim and the sustainability of the islands. *Quaternary International*, 184, 1-204, 2008.
- ⑬Nasu, H. & Momohara, A. and Yasuda, Y.: The occurrence and identification of *Setaria italica* (L.) P. Beauv. (foxtile millet) grains from the Chengtoushan site (ca. 5800 cal B.P.) in Central China, with reference to the domestication centre in Asia. *Vegetation History and Archaeobotany*, 16, 481-494, 2007.
- ⑭Yasuda, Y. and Barry V. Rolett (eds.) : Sustainability of the Islands and Resource- Recycling Society. *Monsoon*, vol. 6, 80, 2005.
- ⑮Nakagawa, T. & Kitagawa, H. & Yasuda, Y. & Tarasov, P.E. & Gotanda, K. & Sawai, Y.: Pollen/event stratigraphy of the varved sediment of Lake Suigetsu, central Japan from 15,701 to 10,271 SG vyr BP (Suigetsu varve years before present): Description, interpretation, and correlation with other regions. *Quaternary Science Reviews*, 24, 1691-1701, 2005.
- ⑯Yasuda, Y. & Fujiki,T. & Nasu, H. & Kato,M. and Naruse,T.: Environmental archaeology at the Chengtoushan site, Hunan Province, China. *Quaternary International*, 123-125, 149-158,2004.
- ⑰Yasuda, Y.& Yamaguchi, K. & Nakagawa, T. &, Fukusawa, H. & Kitagawa, J. and Okamura, M.: Environmental variability and human adaptation during the Lateglacial/Holocene transition in Japan with reference to pollen analysis of the SG4 core from Lake Suigetsu. *Quaternary International*, 123-125, 11-19, 2004.
- ⑱Fujiki, T. and Yasuda, Y.: Vegetation history during the Holocene from Lake Hyanho, northern Korea. *Quaternary International*, 123-125, 63-69, 2004.
- ⑲Kharakwal, J.S. & Yano, A. & Yasuda, Y. & Shinde, V. and Osada, T.: Cord impressed ware and rice cultivation in south Asia, China and Japan. *Quaternary International*, 123-125, 105-115, 2004.

- ⑳Makohonienko, M. & Kitagawa, H. & Naruse, T. & Nasu, H., & Momohara, A., & Okuno, M., Fujiki, T., & Liu, X., & Yasuda, Y. and Yin, H.: Late-Holocene natural and anthropogenic vegetation changes in the Dongbei Pingyuan (Machurian Plain). *Quaternary International*, 123-125, 71-88, 2004.
- ㉑Kitagawa, J. and Yasuda, Y.: The influence of climatic change on chestnut and horse chestnut preservation around Jomon sites in Northeastern Japan with special reference to the Sannai-Maruyama and Kamegaoka sites. *Quaternary International*, 123-125, 89-103, 2004.
- ㉒Kitagawa, J. & Nakagawa, T. & Fujiki, T. & Yamaguchi, K. and Yasuda, Y.: Human activity and climate change during the historical period in central upland Japan with reference to forest dynamics and the cultivation of Japanese horse chestnut (*Aesculus turbinata*). *Vegetation History and Archaeobotany*, 13, 105-113, 2004.
- ㉓Yasuda, Y. and Catto, N. (eds.): Environmental variability and human adaptation since the last glacial period. *Quaternary International*, 123-125, 1-158, 2004.
- ㉔Yasuda, Y.: Monsoon and Religions. In Yasuda, Y., Shinde, V. (eds.): *Monsoon and civilization*. Lustre Press and Roli Books, 319-338, 2003..
- ㉕Nakagawa, T. & Kitagawa, H. & Yasuda, Y., Tarasov, Pavel E. & Nishida, K. & Gotanda, K., Sawai, Y. and Yangtze River Civilization Program Members : Asynchronous climatic changes in the North Atlantic and Japan during the Last Termination. *Sciences*, 299, 688-691, 2003
- ㉖Yasuda, Y. and Negendank, J.F.W.: Environmental variability in the East and West Eurasia. *Quaternary International*, 105: 1-6. 2003.
- ㉗ Yasuda, Y.(ed.): Environmental variability in East and West Eurasia. *Quaternary International*, 105, 1-80, 2003.
- ㉘Yasuda, Y.: Monsoon and Religions. In Yasuda, Y. & Shinde, V.(eds.) :*Monsoon and civilization*. Lustre Press and Roli Books, 319-338, 2003.
- ㉙Yasuda, Y. and Negendank, J.F.W.: Environmental variability in the East and West Eurasia. *Quaternary International* ,105: 1-6. 2003.
- ㉚Nakagawa, T. & Tarasov, P.E. & Nishida, K. & Gotanda, K. and Yasuda, Y.: Quantitative pollen-based climate reconstruction in central Japan: application to surface and Late Quaternary spectra. *Quaternary Science Review*, 21, 2099-2113, 2002.
- ㉛Sawai, Y. & Nasu, H. and Yasuda, Y.: Fluctuations in relative sea-level during the past 3000 yr in the Onnetoh estuary, Hokkaido, northern Japan. *Journal of Quaternary Science*, 17,

607-622, 2002.

- ③②Gotanda, K. & Nakagawa, T. & Tarasov, P. & Kitagawa, J. & Inoue, Y. and Yasuda, Y.: Biome classification from Japanese pollen data. *Quaternary Science Review*, 21, 647-657, 2002.
- ③③Okuda, M. & van Vugt, N. & Nakagawa, T. & Ikeya, M. & Hayashida, A. & Yasuda, Y., and Setoguchi, A.: Palynological evidence for the astronomical origin of regnite-detritus sequence in the Middle Pleistocene Marathousa Member, Megalopolis, SW Greece. *Earth Planetary Science Letters*, 201, 143-157, 2002.
- ③④Nakagawa, T. & Tarasov, P. E. & Nishida, K. & Gotanda, K. and Yasuda, Y.: Quantitative pollen-based climate reconstruction in central Japan: application to surface and Late Quaternary spectra. *Quaternary Science Review*, 21, 2099-2113, 2002.
- ③⑤Sawai, Y. & Nasu, H. and Yasuda, Y.: Fluctuations in relative sea-level during the past 3000 yr in the Onnetoh estuary, Hokkaido, northern Japan. *Journal of Quaternary Science*, 17, 607-622, 2002.
- ③⑥Yasuda, Y.: Second East Side Story: Origin of Agriculture in West Asia. In Yasuda, Y. (ed.): *The Origins of Pottery and Agriculture*, Lustre Press and Roli Books, 15-38, 2002.
- ③⑦Yasuda, Y.: Origins of Pottery and Agriculture in East Asia. In Yasuda, Y. (ed.): *The Origins of Pottery and Agriculture*, Lustre Press and Roli Books, 119-142, 2002.
- ③⑧Yasuda, Y.: Shift from Monistic to Pluralistic View of Civilization. In Yasuda, Y. (ed.): *The Origins of Pottery and Agriculture*, Lustre Press and Roli Books, 351-362, 2002.
- ③⑨Gotanda, K. & Nakagawa, T. & Tarasov, P. E. & Kitagawa, J. & Inoue, Y. and Yasuda, Y.: Biome classification from Japanese Pollen data. *Quaternary Science Review*, 21, 647-657, 2002.
- ④⑩Yasuda, Y. & Kitagawa, H. and Nakagawa, T.: The earliest record of major anthropogenic deforestation in the Ghab Valley, northwest Syria. *Quaternary International*, 73, 127-136, 2000.

【中国語編著】

- ①『城頭山』（何介鈞・安田喜憲 共編）（文物出版社 北京 2007年）
- ②『蛇与十字架』（王秀文訳）（単著）（世界知識出版社 大連 2004年）
- ③『森林日本文化之母』（祭敦達訳）（単著）（上海科学技術出版 上海 2002年）
- ④『神話・祭祀与長江文明』（単編）（文物出版社 北京 2002年）
- ⑤『長江流域青銅器文化』（高崇文・安田喜憲 共編）（科学出版社 北京 2002年）

⑥『稲作陶器和都市的起源』（澁文明・安田喜憲 共編）（文物出版社 北京 2001年）

【単著】

- ①『水の恵みと生命文明』（第三文明社 2019年）
- ②『文明の精神』（古今書院 2018年）
- ③『森の日本文明史』（古今書院 2017年）
- ④『人類一万年の文明論』（東洋経済新報社 2017年）
- ⑤『環境文明論』（論創社 2016年）
- ⑥『ミルクを飲まない文明』（洋泉社歴史新書 53 2015年）
- ⑦『日本神話と長江文明』（雄山閣 2015年）
- ⑧『一万年前』（イーストプレス 2014年）
- ⑨『環境考古学への道』（ミネルヴァ書房 2013年）
- ⑩『山は市場原理主義と闘っている』（東洋経済新報社 2009年）
- ⑪『稲作漁撈文明』（雄山閣 2009年）
- ⑫『生命文明の世紀へ』（第三文明社レグルス文庫 2008年）
- ⑬『環境考古学事始』（再販）（洋泉社 2007年）
- ⑭『一神教の闇』（筑摩書房 2006年）
- ⑮『気候変動の文明史』（NTT出版 2004年）
- ⑯『文明の環境史観』（中公叢書 2004年）
- ⑰『古代日本のルーツ 長江文明の謎』（青春出版社 2003年）
- ⑱『日本よ、森の環境国家たれ』（中公叢書 2002年）
- ⑲『古代文明の興亡』（学研M文庫 2002年）
- ⑳『環境考古学のすすめ』（丸善ライブラリー 2001年）
- ㉑『龍の文明・太陽の文明』（PHP新書、2001年）
- ㉒『大河文明の誕生』（角川書店、2000年）
- ㉓『東西文明の風土』（朝倉書店、1999年）
- ㉔『森を守る文明、支配する文明』（PHP新書、1997年）
- ㉕『縄文文明の環境』（吉川弘文館 1997年）
- ㉖『森の日本文化』（新思索社 1996年）
- ㉗『森のこころと文明』（NHK出版 1996年）
- ㉘『森と文明の物語』（筑摩新書 1995年）
- ㉙『蛇と十字架』（人文書院 1994年）

- ⑩『気候が文明を変える』（岩波書店 1993年）
- ⑪『日本文化の風土』（朝倉書店 1992年）
- ⑫『大地母神の時代』（角川書店 1991年）
- ⑬『人類破滅の選択』（学習研究社 1990年）
- ⑭『気候と文明の盛衰』（朝倉書店 1990年）
- ⑮『文明は緑を食べる』（読売新聞社 1989年）
- ⑯『森林の荒廃と文明の盛衰』（思索社 1988年）
- ⑰『世界史のなかの縄文文化』（雄山閣出版 1987年）
- ⑱『環境考古学事始』（NHKブックス 1980年）

【共著】

- ①『文明の原理を問う』（安田喜憲・大島直行・町田宗鳳・大橋力・中谷巖）（麗澤大学出版会 2011年）
- ②『奪われる日本の森』（平野秀樹・安田喜憲）（新潮社 2009年）
- ③『文明の風土を問う』（安田喜憲・松本健一・欠端実・服部英二）（麗澤大学出版会 2006年）
- ④『長江文明の探究』（梅原 猛・安田喜憲）（新思索社 2004年）
- ⑤『対談 文明のこころを問う』（小林道憲・安田喜憲）（麗澤大学出版会 2003年）
- ⑥『敵を作る文明・和をなす文明』（川勝平太・安田喜憲）（PHP研究所 2003年）
- ⑦『地球文明の寿命』（松井孝典・安田喜憲）（PHP研究所 2001年）
- ⑧『環境と文明の世界史』（石弘之・安田喜憲・湯浅赳夫）（洋泉社新書 2001年）
- ⑨『森と文明』（安田喜憲・鶴見精二）（晶文社 1994年）

【編書】

- ①『生命文明の時代』（安田喜憲ほか共編）（電子出版）
（ローコストカンパニー・ものづくり生命文明機構 2019年）
- ②『東シナ海と弥生文化』（安田喜憲・七田忠昭 共編）（雄山閣 2018年）
- ③『自然と人間の関係の地理学』（安田喜憲・高橋学 共編）（古今書院 2017年）
- ④『山岳信仰と日本人』（NTT出版 2006年）
- ⑤『龍の文明史』（八坂書房 2006年）
- ⑥『巨大災害の時代を生き抜く』（ウェッジ選書 2005年）
- ⑦『環境考古学ハンドブック』（朝倉書店 2004年）
- ⑧『魔女の文明史』（八坂書房 2004年）
- ⑨『日本考古学』（有斐閣 1999年）

- ⑩『図説 日本列島植生史』（安田喜憲・三好教夫 共編）（朝倉書店 1998年）
- ⑪『縄文文明の発見』（梅原猛・安田喜憲 共編）（PHP 研究所 1995年）
- ⑫『講座・文明と環境 全15巻』（梅原猛・伊東俊太郎・安田喜憲 共編）（朝倉書店 1995～1996年）
- ⑬『古代文明と環境』（安田喜憲・川西宏幸 共編）（思文閣出版 1994年）
- ⑭『草原の思想・森の哲学』（伊東俊太郎・安田喜憲 共編）（講談社 1993年）
- ⑮『森の文明・循環の思想』（梅原猛・安田喜憲 共編）（講談社 1993年）
- ⑯『海・潟・日本人』（小泉格・安田喜憲 共編）（講談社 1993年）
- ⑰『謎の王国・渤海』（中西進・安田喜憲 共編）（角川書店 1992年）

【監修】

- ①『5万年前』（イーストプレス 2007年）
- ②『新世界地理—大地と人間の物語全13巻』（立川武蔵・安田喜憲 共監：（朝倉書店 2007年～2019年）

業 績：

氏の主な業績は、以下のとおりである。

氏は、1980年『環境考古学事始』（NHK ブックス）において、花粉の化石を使用した花粉分析の手法に立脚して、日本の文化を森の文化であるとはじめて指摘した。当時は日本文化が森の文化であることを指摘するのは、勇気にあることであつた。以来、氏は、花粉分析の実証的データに基づいた森と文化、森と文明の関係の研究を一貫して行ってきた。

1988年『森林の荒廃と文明の盛衰』（思索社）では、文明の興亡には森林の破壊が深くかかわっていることを、地中海地域の花粉分析の結果から、世界ではじめて指摘した。

1990年『気候と文明の盛衰』（朝倉書店）、1993年『気候が文明を変える』（岩波書店）、2004年『気候変動の文明史』（NTT出版）、2004年『文明の環境史観』（中公叢書）などにおいて、気候変動と文明の興亡をより確かなレベルでも解明した。

1997年『森を守る文明・支配する文明』（PHP 研究所）では、東洋の稲作漁撈社会の森を守る文明と西洋の畑作牧畜社会の森を破壊する文明の相違を、明白にはじめて指摘した。その説は2000年の『大河文明の誕生』（角川書店）並びに2009年『稲作漁撈文明』（雄山閣出版）までの一貫しての主張であり、広く世界に受け入れられはじめています。

2001年『Forest and Civilisations』（Lustre Press and Roli Book）では、森の破壊が文明の崩壊のみでなく、人々の心にまで深く影響していることを世界ではじめて指摘した。この英文の著書は各国で

広く読まれ、各国民はショックを受けたとみえ、各国で多くの書評として取り上げられ、ロンドンの書店では平積みの本として売られていた。

近年では、『森の日本文明史』（古今書院 2017年）を刊行した。

氏の関心は、縄文文化（『世界史のなかの縄文文化』雄山閣出版 1987年）からはじまり、地中海文明、インダス文明、長江文明、メソポタミア文明、最近の環太平洋文明やエジプト文明、クメール文明の研究に至るまで、文明の興亡と環境史との対応関係を解明し、「環境文明論」（『環境文明論』論創社 2016年）を体系化することにあつた。とりわけ、長江文明の発見は大きな業績である。日中共同の「長江文明の探求」プロジェクトを推進し、長江文明の興亡を環境史との関係の中であらたに解明し、稲作漁撈文明の存在を発見した功績は大なるものがある。

森の変遷が心の変遷にまで大きな影響をあたえているのではないかという氏の仮説（『森のこころと文明』NHK出版 1996年）は、近年の大橋力氏（『ハイパーソニックエフェクト』岩波書店 2017年）らによる環境情報科学や遺伝子の研究などからも指摘されるようになった。

氏は環境と文明の関係のみでなく、文明の持つ世界観や価値観、文明の心、文明と宗教にも深い関心を示し、1994年『蛇と十字架』（人文書院）、2001年『龍の文明・太陽の文明』（PHP新書）、2006年『一神教の闇』（ちくま新書）など、興味深い論考を残している。

人間の心のあり方、宗教が自然破壊や生態系の保全にまで強くかかわり、それがひいては21世紀の地球環境問題の解決に深くかかわっていることを指摘した。なかでも2009年の『山は市場原理主義と闘っている』（東洋経済新報社）は、興味深い論考である。

2001年には、ノーベル賞以外の分野が対象となるスウェーデンのクラフォード賞（Geoscience）の候補にアジア人としてノミネートされ、2006年にはスウェーデン王立科学アカデミー会員（クラスX）となる。ノーベル賞の選考にかかわるアジア人はそう多くない。

また、スウェーデン国王グスタフ16世が毎年主催している世界最先端の研究者による地球環境問題を検討するロイヤルコロキウムにも、2007年と2009年の2回、アジア人として招待されるなど、多くの国際シンポジウムや国際学会からの招待講演を受けるとともに、数々の国際シンポジウムのオーガナイザーも務めた。

さらにアジアで初めて、福井県水月湖にボーリング（1991年文部科学省科学研究費重点領域研究の支援を受けて実施）して、年縞（ねんこう）を発見（それが年1枚ずつ形成される年縞であることが明らかになったのは1993年）した。花粉の化石を使用して過去の森林の変遷や気候変動を、年単位で飛躍的に高精度に復元できる道を開拓した。これまでの花粉分析による森の変遷や気候変動の研究はせいぜい数十年単位であったが、この年縞の発見によって過去の森林の変遷や気候変動が年単位で論じることが可能となり、人間の活動と森の歴史を高精度にかつ定量的に解明できる道

を開拓した。

年縞の分析による年単位の森林変遷史や気候変動と文明の興亡の研究結果は、Science (vol.299、2003)をはじめ国際誌に多くの論文が掲載されるとともに、氏が編集した特集号が国際誌 Quaternary International にすでに3回も (vol.105,2003年, vol.123-125,2004年, vol.184,2008年) 組まれるなど、国際的に高く評価されている。年縞の発見は長江文明の発見と共に同氏が残した大きな業績の一つである。北川浩之氏・中川毅氏 (『人類と気候の10万年史』講談社 2017年) や山田和芳氏などの後継者にも恵まれ、年縞の発見によって、環境史と文明の興亡の歴史を年単位で論じることが可能となる道が開かれた。2010年には、氏が「環境考古学」を提唱してから30年になるということで、これまでヨーロッパ諸国のみで行われていた国際環境考古学学会がアジアの京都で開催された。2012年には長江文明とカンボジアのクメール文明の調査研究から、長江流域の稲作漁撈文明がメコン川を下り、カンボジアで花開かせた聖なる水と山を崇拝する水の文明であることを、世界的出版社 Springer 社より『Water Civilization : From Yangtze to Khmer Civilizations』を刊行した。本著は世界でも好評を博し、Springer 社が出版した本の中でもよく売れている本にランキングされていると Springer 社より連絡があった。2012年には国際日本文化研究センターを定年退職し、東北大学大学院環境科学研究科教授に就任した。また2013年には孔子学院を開設し中国と交流のある立命館大学の環太平洋文明研究センターの所長に就任し、日中の友好交流に貢献した。

2015年には静岡県補佐官・「ふじのくに地球環境史ミュージアム」館長となり、現在に至っている。氏が尽力し造り上げ館長となった静岡県の「ふじのくに地球環境史ミュージアム」は、2019年に東京上野の国立科学博物館などを抜き、日本一のミュージアムに選定された。それは日本の誇りだということで、文部科学省の文化庁より招待されEUのクロアチアで表彰式も行われた。

授 賞 対 象 :

氏は、アジアで初めて「年縞」を発見し、その分析を通じ、環境史と文明の興亡の歴史を年単位で高精度に復元できる道を開拓した。さらに文明や歴史を自然環境との相互関係で明らかにしようとする学問「環境考古学」を提唱・確立するとともに、長江文明の興亡を環境史との関係の中であらたに解明し、稲作漁撈文明の存在を発見するなど、比較文明論の発展に寄与するなど、数々の功績がある。

アカデミア賞（文化・社会部門）

氏 名 : ^{まつ}松 ^だ田 ^{おさむ}治

生 年 月 日 : 1944 (昭和 19) 年 2 月 18 日生

出 身 地 : 群馬県

学 歴 :

1968 (昭和 43) 年 3 月 東京大学農学部水産学科卒業

1970 (昭和 45) 年 3 月 東京大学大学院農学系研究科水産学専攻修士課程修了

1971 (昭和 46) 年 11 月 東京大学大学院農学系研究科博士課程水産学専攻中途退学

学 位 ・ 称 号 : 東京大学農学博士

現在の主な職業 :

広島大学名誉教授

NPO 法人 里海づくり研究会議 理事長

公益財団法人 国際エメックスセンター 副理事長

NPO 法人 瀬戸内海研究会議 顧問

経 歴 :

1971 (昭和 46) 年 11 月 広島大学水畜産学部助手

1980 (昭和 55) 年 4 月 広島大学生物生産学部助教授

1983 (昭和 58) 年 11 月 第 25 次南極地域観測隊越冬隊 (～1985 年 3 月)
(国際 BIOMASS プロジェクト)

1990 (平成 2) 年 11 月 広島大学生物生産学部教授

2002 (平成 14) 年 4 月 広島大学生物圏科学研究科教授

2003 (平成 15) 年 3 月 広島大学退職

2003 (平成 15) 年 4 月 広島大学名誉教授

- 2003（平成 15）年 4 月 科学技術振興機構（JST）地域結集型共同研究事業
「閉鎖性海域の環境創生プロジェクト」新技術エージェント
- 2003（平成 15）年 8 月 瀬戸内海研究会議 会長（現在は同研究会議顧問）
- 2015（平成 27）年 6 月 公益財団法人 国際エメックスセンター 副理事長
- 2016（平成 28）年 1 月 NPO 法人 里海づくり研究会議 理事長（現在に至る。）

【学会活動等】

日本水産学会、日本海洋学会、日本プランクトン学会、日本海洋政策学会、瀬戸内海研究会議等へ所属、日本水産学会評議員、日本プランクトン学会評議員、日本水産学会環境保全委員会委員、日本海洋学会沿岸部会委員、日本学術会議海洋科学連絡委員会委員、「海洋政策研究」編集委員、瀬戸内海研究会議会長等を歴任。

【公的委員会活動等】

中央環境審議会（瀬戸内海部会委員、同部会企画専門委員会委員長、水環境部会委員、総量規制基準専門委員会委員、水生生物保全環境基準類型指定専門委員会委員）、環境省有明海・八代海水環境調査検討委員会委員、環境省有明海等浅海域定量評価手法検討委員会委員、環境省養殖負荷算定手法検討会委員、環境省里海創生支援検討会委員、環境省海域の物質循環健全化計画統括検討委員会委員長、環境省環境技術実証事業 WG 委員、文部科学省南極観測事業計画検討委員会委員、文部科学省東北マリンサイエンス拠点委員会座長、日本学術振興会科学研究費委員会委員、日本学術振興会拠点大学交流事業評価委員、大学評価・学位授与機構学位審査会専門委員、農林水産省有明海ノリ不作等対策「第 3 者委員会」委員、農林水産省生物多様性戦略検討会委員、農林水産省農林水産アドバイザー会議委員、水産庁「海洋・沿岸における水産環境整備のあり方検討会」委員、総合海洋政策本部：第 3 次海洋基本計画策定基本計画委員会・海洋環境 PT(Project Team)委員、(独)水産総合研究センター藻場干潟炭素吸収能検討委員会委員、(独)水産総合研究センター瀬戸内海区水産研究所運営会議委員、(独)水産大学校外部評価委員、(財)環日本海環境協力センター評議員、同センター赤潮/HAB 調査検討委員会委員、(公財)国際エメックスセンター理事・科学政策委員、(財)日本水産資源保護協会：環境保全型養殖検討会委員、水産用水基準検討協議会委員、広域レベル漁場環境保全方策検討委員会委員、全漁連：多面的機能委員会、(財)海洋政策研究財団総合的海洋政策研究委員会委員、広島県環境審議会委員（会長代理、生活環境部会長）、広島県環境影響評価技術審査委員会部会長、広島県漁場環境保全等対策委員会委員長、広島県研究開発推進会議委員、広島海区漁業調整委員会委員、広島湾再生推進会議アドバイザーボード委員、愛知県水産試験場研究評価委員会委員、愛媛県農林水産関係試験研究課題評価専門部会委員、香川県かがわ里海づく

り協議会アドバイザー、東広島市環境審議会委員、志摩市里海創生推進協議会委員、UNEP-NOWPAP（北西太平洋行動計画）expert、国連大学「里山里海 SGA（Sub-global Assessment）」クラスター共同議長、その他を歴任または在任中。

【教育研究等】

京都大学、東京大学、神戸大学、兵庫県立大学等の非常勤講師、(独)産業技術総合研究所(AIST)研究顧問、(財)海洋政策研究財団(OPRF)特別研究員、海洋政策研究所(OPRI)客員研究員、その他を歴任。

【JICA 国際協力】

専門家派遣：タイ 2 回（沿岸海域の富栄養化制御とモニタリング）

エルサルバドル 2 回（閉鎖性内湾の資源環境管理）

JICA 特別研修コース：「沿岸海域の環境管理」コース・リーダーその他

過去における表彰：

2003（平成 15）年 10 月 環境大臣表彰（瀬戸内海環境保全の推進）

主要著書・論文等：

【著書（最近の主要 10 冊を掲載）】

- ①Coasts and Estuaries, The Future, Elsevier, 2019, 共著.
- ②沿岸域総合管理入門 豊かな海と人の共生を目指して、東海大学出版会, 2016, 共著.
- ③Connectivity of Hills, Human and Oceans, Challenge to Improvement of Watershed and Coastal Environments, Kyoto University Press, 2014, 共著.
- ④*Satoyama - Satoumi* Ecosystems and Human Well-Being, United Nations University Press, 2012, 共著.
- ⑤The Dilemma of Boundaries-Toward a New Concept of Catchment, Springer, 2012, 共著.
- ⑥「里海」としての沿岸域の新たな利用, 恒星社厚生閣, 2010, 共著.
- ⑦Asia Pacific Coasts and Their Management, States of Environment, Springer, 2008, 共著.
- ⑧瀬戸内海を里海に—新たな視点による再生方策—, 恒星社厚生閣, 2007, 編著.
- ⑨森里海連環学—森から海までの統合的管理を目指して—, 京都大学学術出版会, 2007, 共著.
- ⑩海洋問題入門—海洋の総合的管理を学ぶ—, 丸善, 2007, 共著.

【論文・報告など（2019 年—2005 年の 115 編のうちの 15 編を掲載）】

- ①藻場・干潟の望ましい保全のあり方, 水産工学, Vol.55. 41-49, 2019.

- ②New Direction of Management Policies in the Seto Inland Sea, Japan, in a Changing Environment, 水研機構研報, No.49, 9-15, 2019.
- ③「里海」生誕 20 周年を迎えて～これまでの進展とこれからの展望～, アクアネット, 8月号 (隔月連載「沿岸環境の再生と機能回復」第 82 回), 62-67, 2018.
- ④「里海づくり」に果たす漁業関係者の役割, 農中総研「調査と情報」, 67号, 34-35, 2018.
- ⑤国際的視点から見た里海概念, 水環境学会誌, Vol.40, 381-384, 2017.
- ⑥豊かな瀬戸内海へ, 瀬戸内海基本計画の大幅変更が閣議決定～これからの豊かな海づくりにどう活かすか～, 豊かな海, 36:7-12, 2015.
- ⑦水産環境整備の必要性について, 漁港漁場漁村研報, 37:16-22, 2015.
- ⑧*Satoumi* (里海) は国際的にどのように捉えられているか?, 日本水産学会誌, 79(6), 1027-1029, 2013.
- ⑨瀬戸内海における今後の目指すべき将来像と環境保全・再生のあり方, 瀬戸内海, No 65, 4-8, 2013.
- ⑩Towards *Satoumi* in Ago Bay, CBD technical Series No. 61, Biological and Cultural Diversity in Coastal Communities: Exploring the Potential of *Satoumi* for Implementing the Ecosystem Approach in the Japanese Archipelago, 62-69, 2011.
- ⑪「里海づくり」をめぐる最近の動きと沿岸域の総合的管理, 日本海水学会誌, 65:199-209, 2011.
- ⑫海域の物質循環健全化計画, 用水と廃水, Vol. 53, No. 1, 51-58, 2011.
- ⑬Recent Attempt towards Environmental Restoration of Enclosed Coastal Seas: Ago Bay Restoration Project Based on the New Concept of *Sato-Umi*, 水産総合研究センター研究報告, Vol. 29, 9-18, 2010.
- ⑭里海について一人と海とのつながりー, 国立公園 No 675, 9-12, 2009.
- ⑮瀬戸内海の新たな再生方策としての「里海」づくり, 学術の動向, 2008-6, 15-23, 2008.

【国内における講演、発表など (2019年-2005年の141件のうち20件を掲載)】

- ①瀬戸内海的环境保全と里海づくりの展開、平和政策学術フォーラム in 広島、広島市西区民文化センター、広島市、2019. 9. 26.
- ②里海と地域振興をつなぐ、海洋教育シンポジウム：子どもたちが拓く〈地方再生〉の未来～海洋教育の可能性を考える～、オルガ地下ホール、岡山市、2019. 1. 26.
- ③海洋環境の維持・保全と具体的施策について、瀬戸内海環境保全協会特別講演会「瀬戸内海を取り巻く海洋政策の動向～海洋基本計画と里海づくり～」、ラッセホール、神戸市、2019. 1. 22.
- ④瀬戸内海的环境管理からみた陸水問題、日本陸水学会 第 83 回岡山大会公開講演会：「瀬戸内海

から考える陸水研究の将来」、岡山大学創立 50 周年記念館、岡山市、2018. 10. 5.

- ⑤瀬戸内海的环境管理～瀬戸内法改正後の新たな動き～瀬戸内海環境保全協会、平成 29 年度講演会(基調講演)、兵庫県民会館パルテホール、神戸市、2018. 2. 16.
- ⑥英虞湾 - 環境再生から新しい里海のまち・志摩へ - : 第 34 回「沿環連」ジョイントシンポジウム“我が国における沿岸域環境の現状と問題点、および将来展望”、兵庫県民会館、神戸市、2017. 12. 8.
- ⑦瀬戸内海が目指す豊かな里海と藻場・干潟の再生：東北マリンサイエンス拠点形成事業 TEAMS セミナー（「世界防災フォーラム」関連行事）、東北大学 青葉山コモンズ、仙台市、2017. 11. 27.
- ⑧日本発「里海（*Satoumi*）」を世界に広げる：地球環境「自然学」講座「森里海のつながり 生命の循環」、此花会館、大阪市、2016. 11. 26.
- ⑨大きく変わる瀬戸内海的环境管理～豊かな里海をめざして～：2016 年度 生物地球化学研究会(基調講演)、岡山大学、岡山市、2016. 11. 20.
- ⑩里海の先にあるもの：平成 27 年度 三重県漁港漁場研修会『里海資本論』豊かな資源を育む、母なる伊勢湾の復活に向けて～伊勢湾アサリプロジェクトの推進～、三重県総合文化センター、津市、2016.2.2.
- ⑪里海と *Satoumi* からみた森里川海のつながり：つなげよう、支えよう森里川海シンポジウム in 香川 森里川海の恵み、地域のあしたを考える、香川県社会福総合センター、高松市、2015. 12. 24.
- ⑫里海の取組について：沿岸域総合管理入門研修会～海を活かしたまちづくりに向けて～、志摩市商工会館、志摩市、2015. 10. 29.
- ⑬水産環境整備の必要性について～里海の視点からの提言～：漁港漁場漁村総合研究所 第 8 回調査研究成果発表会「豊かな生息環境の創造に向けて～水産環境整備の取り組みと今後の展望～」(基調講演)、発明会館ホール、東京都、2014. 12. 11.
- ⑭瀬戸内海的环境再生と里海づくり：第 30 回水郷水都全国会議東広島大会「みんながかかわる里山・里海」、広島大学、東広島市、2014. 12. 7.
- ⑮目指すべき将来像と新「瀬戸内法」システムの展望：2014 年度日本プランクトン学会・日本ベントス学会合同大会公開シンポジウム“瀬戸内海は豊かな海ではなくなったのか？”(基調講演)、広島大学、東広島市、2014. 9. 7
- ⑯里海・*Satoumi* からみた海の利用と保全：全国日本学士会 2014 年公開シンポジウム「海遍路・東北-海から自然と文化を考える」、京都大学医学部 芝蘭会館、京都市、2014. 6. 8.
- ⑰瀬戸内海の再生～豊かで美しい里海をめざして～瀬戸内海環境保全特別措置法制定 40 周年記念式典シンポジウム(基調説明)、サンポートホール高松、高松市、2013. 9. 7.
- ⑱里海づくりとアマモ場再生のための新たな連携と枠組みの可能性：第 14 回広島湾研究集会「ア

マモ場の保全・再生へ向けての先進的な取り組み」(基調講演)、広島県情報プラザ多目的ホール、広島市、2013. 12. 20.

⑱豊かな瀬戸内海の再生に向けた最近の動き:瀬戸内海関係府県漁連・漁協 平成24年度 第2回組合長会議、神戸ポートピアホテル、神戸市、2013. 2. 16.

⑳アマモ場の役割～なぜ大切なのか?～:全国アマモサミット2012 in 若狭(基調講演)、福井県立小浜水産高等学校、小浜市、2012. 11. 10.

【国際会議などにおける講演 (2019年-2005年の63件のうち20件を掲載)】

① Outline of National Inputs on EcoQO and Numerical Targets from Japan: UNEP-NOWPAP-POMRAC Regional Workshop on POMRAC Activity “Development of Regional NOWPAP EcoQO Targets Aligned with SDG Indicators”, Vladivostok, Russia, Mar. 20, 2019.

② Sharing the Idea of *Satoumi* which can be Utilized to Achieve SDGs 14: JICA/USP-SMS Symposium on “SDGs 14, Community Based Resource Management, and *Satoumi*”, The USP Japan-Pacific ICT Center, Suva, Fiji, Feb. 28, 2019.

③ *Satoumi* and Local Council for Integrated Coastal Management: EAS Congress 2018, Iloilo Convention Center, Iloilo, the Philippines, Nov. 27, 2018.

④ Reality of *Satoumi*-type Coastal Management Expanding in Japan: ECSA57-Changing Estuaries, Coast and Shelf Systems, Perth, Australia, Sep. 4, 2018.

⑤ New Direction of Environmental Management of the Seto Inland Sea, Japan: 13th International MEDCOAST Congress on Coastal and Marine Sciences, Engineering, Management & Conservation, Paradise Bay Resort Hotel, Mellieha, Malta, Oct. 31, 2017.

⑥ New Direction of Management Policies on the Seto Inland Sea, Japan in the Changing Environment: 45th UJNR Scientific Symposium “Marine Aquaculture in a Changing Environment” (Keynote), International Conference Center, Hiroshima, Japan, Oct. 16, 2017.

⑦ Health Examination of Enclosed Coastal Seas-Introduction to Simple, Cost Effective but Holistic Assessment in Japan: XMASIII Special Workshop “The Use of Assessment”, Xiamen University, Xiamen, China, Jan. 11, 2017.

⑧ Recent Shift of Environmental Management Policies in the Seto Inland Sea, Japan from Water Quality Control to Maximization of Ecosystem Services: ECSA 56 Coastal Systems in Transition, Bremen, Germany, Sep. 5, 2016.

⑨ History of Total Pollution Load Control and Possible Future Coastal Management in Japan:

- EMECS11-Sea Coast XXVI Joint Conference (Plenary), St Petersburg, Russia, August 26, 2016.
- ⑩Major Outcome and Recent Trends of TPLMS Policy in Japan with Special Focusing on the Seto Inland Sea: The International Conference for the 10th Anniversary of the TPLMS in Korea, Pullman Hotel, Changwon, Korea, Dec. 16, 2015.
- ⑪Present Status of *Satoumi* Activities in Japan-Case Studies on Playing Role on Coastal Management: EAS-Congress 2015 “Global Targets-Local Benefits” Session 2-Workshop 1-Part 1B: Good Practices, Innovation and Impacts in ICM Applications in Japan, Danang, Vietnam, Nov. 17, 2015.
- ⑫Recent Coastal Environmental Management in Japan Based on New Concept of *Satoumi* which Promote Land-Ocean Interactions: International Workshop on Land-Ocean Interaction in the Coastal Zone and Sustainable Development, Yantai, China, Sep. 16, 2015.
- ⑬Environmental Conservation of the Seto Inland Sea, Japan and a New Concept of *Satoumi*: Fisheries and Ocean Industrial Development Symposium 2015, Pukyong University, Pusan, Korea, May 14, 2015.
- ⑭A Vital Role of *Satoumi* in the Implementation of ICM in Japan: EMECS10-MEDCOAST 2013 Joint Conference, *Satoumi* Special Session, Marmaris, Turkey, Oct. 30, 2013.
- ⑮LOICZ Oriented Restoration of Deteriorated Tidal Flats in the Coastal Area Based on the Concept of *Satoumi*: ECSA53 Conference: Estuaries and Coastal Areas in Times of Intense Change, LOICZ East Asia Yantai Node Session, Shanghai, China, Oct. 14, 2013.
- ⑯Evolution of *Satoumi* Frame during the Recent International Meetings in the Context of Sustainable Coastal Management: EMECS9 *Satoumi* Session-Disseminating the Concept of “*Satoumi*” Internationally-, Baltimore, USA, Aug. 28, 2011.
- ⑰Regional Collaboration on Coastal Environmental Assessment in the Northwest Pacific Action Plan (NOWPAP): EMECS8, Shanghai, China, Oct. 27-30, 2008.
- ⑱Overview of Ago Bay Restoration Project Based on the New Concept of “*Sato Umi*”: A Case of Environmental Restoration of Enclosed Coastal Seas in Japan: KORDI Workshop, Ansan, Korea, Dec. 1, 2006.
- ⑲Proposal for the Restoration of the Seto Inland Sea, Japan Based on a New Concept of “*Sato-Umi*” with Special Emphasis on Biological Diversity and Productivity, EMECS7, Caen, France, May 10, 2006.
- ⑳Habitat Conservation and Living Resource Management in the Seto Inland Sea, Japan:

“Workshop on Ecosystem Management of Interrelated River Basins, Estuaries and Coastal Seas”, Masan, Korea, Jun. 1, 2005.

業 績 :

氏の業績は、研究、教育、社会活動や実践を含めて瀬戸内海的环境保全の推進に関わる部分と、その延長として里海の見方や里海づくりの実践を国内に広め、さらには、*Satoumi*としての国際展開を推進した部分に大きく分けられる。

1) 瀬戸内海の富栄養化機構と環境保全に関する研究

氏が瀬戸内海で富栄養化のメカニズムや富栄養化対策、沿岸環境管理手法などの研究を、本格的に開始したのは広島大学に赴任した 1971 年である。この年は、現在の環境省の前身である環境庁が設置され、いわゆる「瀬戸内法」(瀬戸内海環境保全特別措置法)が、当初、臨時措置法として制定された 1973 年の 2 年前に当たる。当時は、海域の組織的な環境保全活動の黎明期に当たり、富栄養化に伴う甚大な赤潮被害などを防ぐためにも、富栄養化のメカニズムとその原因究明は社会的にも喫緊の課題であった。

氏は富栄養化の原因物質で、かつ海域の生物生産に必須の栄養素でもあるリンに着目して、その動態に関する研究を精力的に行った。このテーマは、氏が大学院時代に進めた海洋微生物による有機態リンの分解に関する研究を端緒にしたもので、これらの成果は、学位論文「富栄養化沿岸海域におけるリンの生物地球化学的循環に関する研究」に取りまとめられた。これに続く栄養塩循環に関する一連の研究成果は、中央環境審議会での瀬戸内海的环境保全施策の立案や地方自治体の環境施策などに様々な形で反映された。

さらに、氏は瀬戸内海研究会議の会長を 10 年以上にわたって務め、毎年、瀬戸内海に関する研究フォーラムやワークショップを瀬戸内周辺の各地で開催するなど、瀬戸内海研究の推進と研究成果の普及や政策提言などにリーダーシップを発揮した。

氏は、瀬戸内海以外にも、南極海、北極海や熱帯沿岸海域などの多くの現場で調査研究を実施し、特に、熱帯のマングローブ域などでは、地域コミュニティとの交流を深めて、これが後の *Satoumi* の国際展開の背景となった。

2) 「瀬戸内海を里海に」への取り組み

瀬戸内海沿岸での人間と海との関係を見直そうという市民活動に端を発した里海、すなわち、地元主導で“豊かな海”を地域に実現する里海は、“日本発、瀬戸内海育ち”とも称される。この背景には、戦後の高度経済成長期の公害時代に、瀬戸内海は著しい環境汚染や赤潮による「瀕死の海」を経験したことがある。その後、日本の多くの沿岸海域では水質汚染問題が一段落し、“きれいな海”

よりも”豊かな海”を臨む声が強まり、里海づくりの実践が全国に広がった。その契機となった著作が、氏が代表編集者として取りまとめた「瀬戸内海を里海に～新たな視点による再生方策～」である。

”新たな視点”には、海の状況だけではなく人間と海との関係性を重視する視点が含まれる。この本が出版された経緯は、瀬戸内海環境保全知事・市長会議が瀬戸内海研究会議に新たな瀬戸内海の再生方策の検討を要請したことに始まる。瀬戸内海研究会議の代表であった氏は、この要請に対し「合宿」を企画するなどして集中的な検討を重ね、里海のことを基軸にした提言書を取りまとめ、知事・市長会議に報告した。この報告書の主な内容を一般向けに再編成して出版したのが、「瀬戸内海を里海に」である。この報告書で提案された新たな再生方策は、首長の集まりである知事・市長会議などを通じて、その後の瀬戸内海の環境保全施策に大きな影響を与えた。

このような活動は、その後、2010年に名古屋で開催された生物多様性条約（CBD）COP10の会議での *Satoumi* の国際的アピールや CBD 事務局による“*Satoumi Manual*”の出版につながった。海洋基本法に基づく海洋基本計画の改定（2013年）では、里海のことを取り入れられるなど、公的制度への波及にも貢献した。2015年の「瀬戸内法」の大幅改正では、改正「瀬戸内法」に基づく国の瀬戸内環境保全基本計画の改定に当たり、氏は中央環境審議会瀬戸内海部会の企画専門委員会委員長などとして国の政策立案にも中核的な役割を果たした。

3) 里海づくりの国内展開

氏はNPO法人 里海づくり研究会議の立ち上げに関わり、現在はこのNPOの理事長として、里海の提唱者である柳哲雄副理事長とともに里海づくりの普及啓発に熱心に取組んでいる。この研究会議は、里海とその考え方が1998年に九州大学の柳哲雄教授（当時）により初めて提唱され、20周年を迎えた2018年には、岡山県の備前市日生で「里海生誕20周年記念シンポジウム」を盛会裏に開催した。このシンポジウムでの強い要請を受けて、2019年には「里海カンファレンス in 恩納村2019」を沖縄で開催し、「里海カンファレンス」という里海に関する新たな全国集会の端緒が生まれた。この集会は、2020年には宮城県の南三陸町で開催予定であり、里海づくりの国内展開が継続的に進められつつある。

瀬戸内海における里海づくりの実践活動としては、香川県の”かがわの里海づくり”施策の立案に当初より関わり、現在もアドバイザーとして実際的な役割を果たしている。備前市日生の里海づくりにも貢献して、地域の活性化や循環型社会の形成に寄与したのみならず、瀬戸内海以外の里海づくりも推進した。一例として、科学技術振興機構（JST）と三重県による地域結集型共同研究事業では、氏は研究コーディネーターを務め、地域の多様な人材と協力して三重県志摩市の英虞湾の再生と里海づくりに大きく貢献した。この活動は志摩市における全国初の里海推進室の設立につなが

り、地域振興にも役立った。なお、この里海推進室は、現在、発展的に SDGs 推進室に改組されている。

環境省が里海づくりを推進した里海創生支援事業においても、里海概念の整理や「里海ネット」の構築などに様々な役割を果たした。環境省による里海づくり活動状況の調査結果によれば、日本全国での里海づくり活動は 2018 年で 291 地域に広がり、里海概念が様々な公的制度にも取り入れられて、藻場の創出・拡大、水質の改善、ごみの減少や水産資源状況の改善などに寄与している。

里海づくりと表裏一体の活動として、海洋政策研究財団の取り組みの一環として沿岸域総合的管理 (ICM) も推進した。この活動は、後述するアジアの多国間パートナーシップである PEMSEA の取り組みにも連動したものである。氏は、月刊「アクアネット誌」には、隔月連載「沿岸環境の再生と機能回復」の執筆を 15 年間にわたって続けており、この中でも、里海や ICM に関連するテーマをしばしば取り上げて、その普及啓発に努めた。

4) 里海づくりの国際展開

日本の伝統的な文化を背景にして生まれた里海の考え方と里海づくりの実践活動は、*Satoumi* として海外でも強い関心が持たれている。その理由として、*Satoumi* は ICM や生態系管理への親和性が強く、地域主導型合意形成手法を備えている点などが挙げられているが、基本的には環境や生態系の保全と利用を調和させている点が大きいの。さらに、近年大きな注目を浴びている SDGs (国連の持続的開発目標) にも非常になじみやすいため、今後も、*Satoumi* にはさらなる国際的進出が予想されるが、氏は、このような *Satoumi* の国際展開に関わる基盤的な状況の創出に大きく貢献した。

氏が、*Satoumi* について海外の国際会議ではじめて報告したのは、2005 年韓国でのアジア諸国を中心にした生態系管理に関する PEMSEA のワークショップであった。この会議では、*Satoumi* に対しアジア諸国から大きな反響があった。そこで、氏は前記の柳教授と示し合わせ、翌 2006 年にフランスのカーン市で開かれた第 7 回世界閉鎖性沿岸海域環境保全会議 (EMECS7) では、柳教授とともに *Satoumi* の概念と実践状況を本格的に紹介した。さらに前述の英虞湾での里海づくりに関する多くの研究発表もなされた。その結果、会議の総括で、「*Satoumi* の考え方は、地域社会と沿岸環境の Symbiosis (共生関係) で、合理的な共存のビジョンである」として非常に高く評価され、*Satoumi* は国際的な地歩を固めた。

氏は、その後も世界各地で *Satoumi* に関する講演やセミナーを精力的に続けているが、この活動には、現在、氏が副理事長を務める (公財) 国際エメックスセンター (EMECS) の果たした役割も大きい。EMECS (Environmental Management of Enclosed Coastal Seas) は世界の閉鎖性沿岸海域の環境管理の推進やネットワークづくりを進め、*Satoumi* の国際展開にも力を入れている。

およそ2年に1回世界各地で開かれる EMECS 会議では、度々、*Satoumi* に関するセッションが開催され、この場でも、氏は *Satoumi* に関する重要な発表を長年続けてきた。さらに、氏は、ECSA、MEDCOAST、PEMSEA、UNEP、World BOSAI Forum、JICA などによる国際会議においても *Satoumi* に関する多くの発信を行った。近年では、多くの国際会議で *Satoumi* に関するテーマが頻繁に取り上げられている。

国連環境計画 (UNEP) の日本海を中心にした北西太平洋行動計画 (NOWPAP) は、日・中・韓・露の4カ国で日本海を中心にした海域環境保全を進める国際プロジェクトであるが、氏は長年にわたって NOWPAP の専門家を務めてきた。この場でも、新たな海の環境生態系指標である EcoQOs (Ecological Quality Objectives) の開発などに、氏の瀬戸内海や *Satoumi* に関する長年の経験が活かされている。

JICA と EMECS が共同で実施した若手外国人向けの「沿岸海域の環境管理」に関する特別研修コースでは、氏が長年コース・リーダーを務め、瀬戸内海を中心にした沿岸域の環境管理手法とともに *Satoumi* についても幅広い研修を進めて、多くの国際的な人材の育成に努めた。

海外における *Satoumi* の実践活動としては、タイにおいてマンブローブ林を利用した物質循環型の魚類養殖を推進したのみならず、メキシコのラパス湾周辺でも漁民や地域住民と連携したメキシコ版の里海づくりを進めている。

授 賞 対 象 :

氏は、瀬戸内海の物質循環や環境保全に関する研究を展開して、地元主導で“豊かな海”を地域に実現する里海概念と里海づくりの実践活動を日本国内で推進し、地域振興や持続的循環型社会の形成に寄与するとともに、里海を *Satoumi* として国際展開を図り、日本の伝統的文化を端緒にする新たな沿岸域管理手法を国際的に広めるなど、数々の功績がある。

【メモ】